

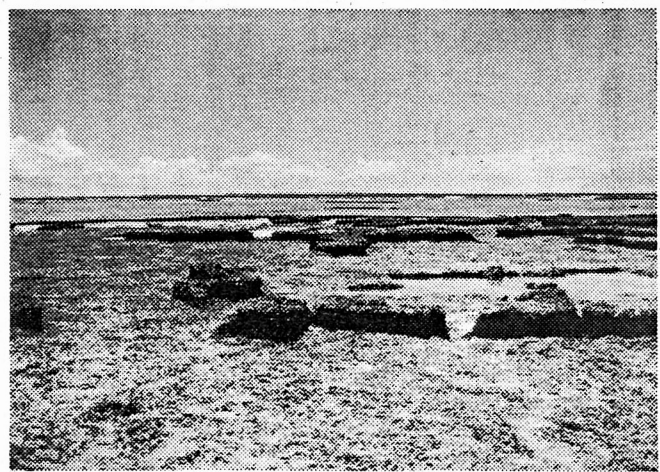
# 野放図な明るさ

「比嘉豊光写真展」

稲嶺 成 祚

画廊「E」風変わりな亭が溢れ出している。真展が開かれている。白く壁に写真が飾られているのは、とどろくような野放図な、画廊の真ん中に「プロシ」次第に彼の隠された意図みたエクターが一台置かれてい、ただである。数百枚の作品をスライドで鑑賞してもおもしろい。先だって、これら数百枚の作品を見てもおもしろい。雲のたぎめる風景あり、青く輝く海の景色あり、祭りあり、人物あり、室内の家具、果物、石垣、屠殺(カキ)された豚、内臓、花、器物、道、遠望された景色、接写されたものの形を失ってしまっ、たニガウリ、とにかく半当た、り次第というか、めっちゃ、まじまじと、主眼の統一はない、手法の一貫性も感じられず、百花りよう乱、ものを光

彼はカメラの真ん中、人物は真ん中に、すえられて、カメラをま、にみる。彼はもの、間を、(5)を、を、



比嘉豊光写真展から

TAKUMI ART EWSの翁長直樹氏の紹介文によると、一九七九年新宿の彼の上映会では、あっけらかんと明るい風景が延々と続いて、「沖繩のきつい状況」を撮っていたといわれ、不評だったといふ。

私は世の中の「大義名分」は、造形的表現にその影響を与えるものではないし、またそうあってはならないと考える。それはもっと体質的、ってよい根深い所から発するものだからだ。比嘉の野放図な明るさは、彼の本質的なものだし、観念的な大義名分の、パイタリティー溢れる明るさの大成をそ願いたいのである。(琉大教授)

同展は11月1日(日)まで。